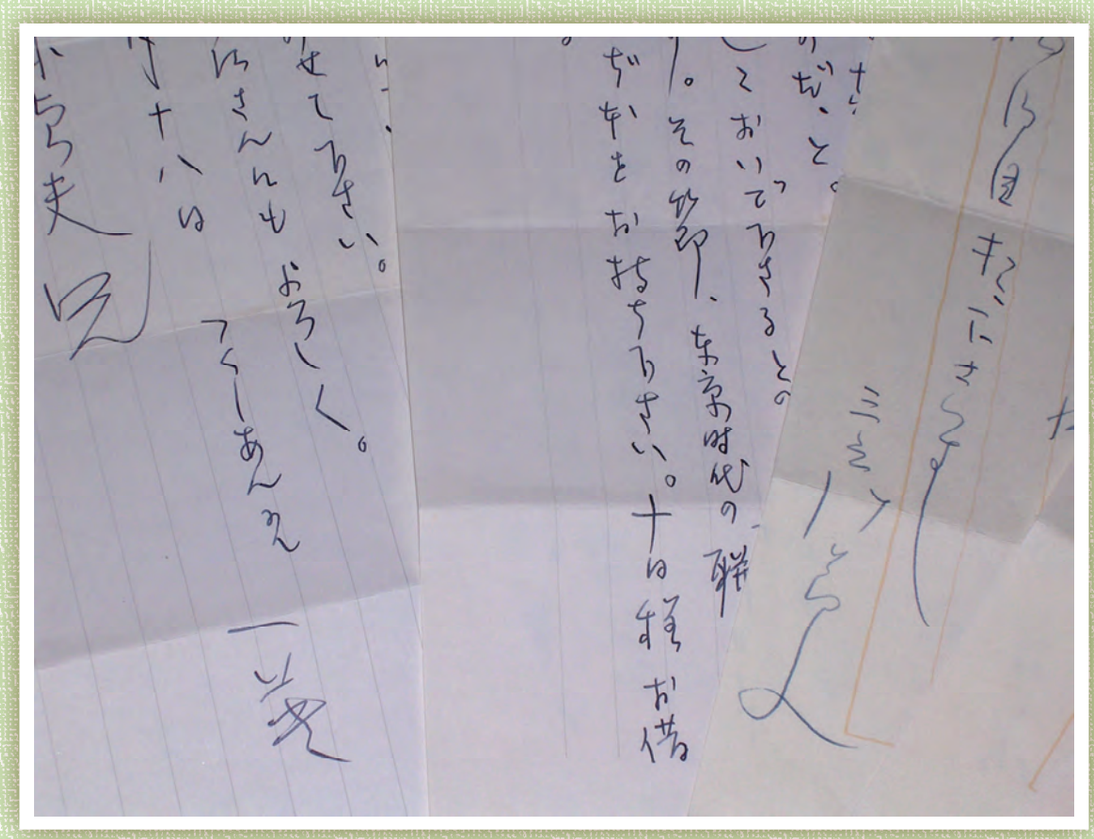
一宮市博物館だより

No.51 2013.3

もくじ

展覧会のご案内
企画展「近代の洋装と毛織物」…… 2
企画展「阿弥陀信仰と木曽川流域」…… 3
寄稿文「町屋遺跡の銅剣形磨製石剣」…… 4
博物館アルバム（平成24年度）…… 6
平成25年度催し物のご案内 …… 8



豊田昌夫氏寄贈書簡類（左「佐藤一英書簡」、右「三岸節子書簡」）（一宮市博物館蔵）

＜企画展＞

近代の洋装と毛織物

文明開化のコスチューム

4月27日(土)～6月2日(日)

【休館日】4月30日(火)・5月7日(火)・13日(月)・20日(月)・27日(月)
【観覧料】一般200円(160円)、高・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)※(　)内は20名以上の団体料金

明治維新の後、天皇を元首とする新たな政府が樹立されました。それまでは公家は衣冠（いかん）や狩衣（かりぎぬ）、武士は裃（かみしも）など、身分によって服制が異なっていました。そのため、様々な身分の人々によって成立していた明治政府には、公の場での服制を統一する必要があったのです。すでに幕末において西洋式調練を行う必要性から軍服の洋装化は行われていましたが、やがて文官の礼服においても洋装化が進められることになりました。このように服制の洋装化は前代の身分制度をリセットする働きもありました。

新たに定められた大礼服や軍服は主に毛織物で作られています。毛織物は専ら海外からの輸入品でしたが、洋装化による需要の増大をふまえ、明治政府は毛織物の国産化を目指すようになります。この展覧会では、当館所蔵の毛織物コレクションを通して、近代の服飾文化や毛織物生産について紹介します。

袿袴（けいこ）明治～昭和前期
明治 17 年（1884）に制定された勅任官・奏任官夫人の礼服は、切り袴（きりばかま）に袿（うちき）を羽織る和装でした。

有爵者大礼服（男爵）　大正時代
衿章・袖章が萌黄色をした男爵用の大礼服。大倉財閥の創設者で大正 4 年（1915）に男爵位を授爵した大倉喜八郎氏の所用品です。

勅任官大礼服　明治～昭和前期
勅任官（明治憲法下での二等以上の高等官）の大礼服。胸飾には、日本の伝統的な意匠である、五七の桐の紋があしらわれています。

楯の会軍服（冬用）　昭和 43 年（1968）頃
三島由紀夫が昭和 43 年（1968）に結成した楯（たて）の会の軍服。三島は会の結成にあたり、私財を投じて軍服を製作し、会員に支給しました。

陸軍砲兵少佐正装　大正～昭和前期
陸軍の軍服はフランス式をモデルとし、後にドイツ式が加味されるようになります。衿章・袖章の黄色は砲兵を表し、昭和 15 年（1940）に緋色に変更される以前のものです。

海軍少将正装　昭和前期
海軍の軍服はイギリス式の軍服に習って制定されました。肩章（けんしょう）のデザインから、昭和 2 年（1927）の改正以降のものであることが分かります。

＜企画展＞

阿弥陀信仰と木曽川流域

6月15日（土）～7月28日（日）

【休館日】6月17日（月）・24日（月）、7月1日（月）・8日（月）・16日（火）・22日（月）
【観覧料】一般200円（160円）、高・大学生100円（80円）、小・中学生50円（40円）
※（　）内は20名以上の団体料金

かつて天災・疾病・あるいは人々の政権争いが続いた時代があり、そのような時代に人々が見出した希望の光が、来世において極楽浄土へ往生するという浄土教の教えでした。その信仰対象は、阿弥陀如来という極楽浄土の仏でした。奈良にある浄瑠璃寺の九体阿弥陀仏や、京都宇治平等院の阿弥陀仏など造形美術的にすぐれたものは別にしても、私たちは日常生活の中で阿弥陀如来を祀ることが多くあります。

さて、当博物館が所在する愛知県一宮市は、浄土宗系の宗派が多い地域です。

一宮市域の阿弥陀信仰をみていくと、真清田神社境内には真清田神社の社僧を務めていた西神宮寺の本尊として、十一世紀初め頃の阿弥陀如来が祀られていました。また同境内には、天台系の人々による念仏三昧を修する常行堂があり、平安時代後期から阿弥陀信仰の流布をみることができます。また木曽川町には、本田善光が如来立像を背負い、信濃国に祀ろうと黒田の宿に一泊し、如来が善光を背負って信濃国へいくという説話が残されており、早くから阿弥陀信仰の定着をみることができます。

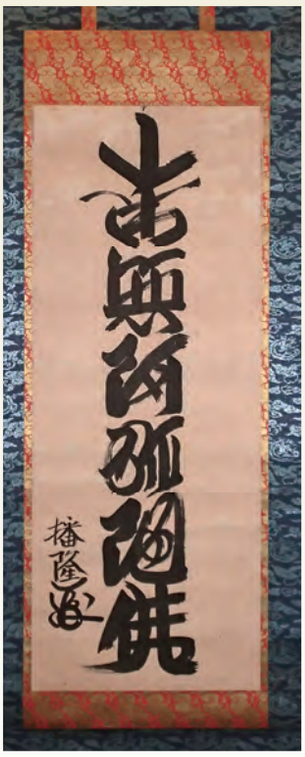
また鎌倉時代になると、専修念仏が盛んになり、ただ阿弥陀仏の本願の力だけを信じて名号「南無阿弥陀仏」を唱えることで、極楽往生を願いました。ただ唱えるという親しみやすさから、当時一般民衆の間に容易に受けいれられ、ひろまりました。さらに諸国を行脚する修行僧の中には、自身を「南無阿弥陀仏」と称し、名号（念仏）のなかに阿弥陀の救済をみた者もいました。

このように「南無阿弥陀仏」となったことによって、親鸞、一遍以後、阿弥陀信仰は踊り念仏・念仏踊り、板碑の名号などへと展開し、民衆救済の阿弥陀信仰となりました。これらの信仰が定着すると、中世後期から近世をとおして、極楽浄土の地とされる熊野や立山への参詣が盛んになります。この地域からも多くの参詣者が旅にでました。

本展覧会では、このような時代の中で、木曽川流域において広がった阿弥陀信仰について、中世から近世への流れを紹介します。

※会期中には、講演会、学芸員による展示解説を開催いたします。

黒田宿の善光寺如来（『尾張名所図会』後編巻六）


播隆上人筆「南無阿弥陀仏」

伝蓮如六字名号

寄稿文

町屋遺跡の銅剣形磨製石剣

（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
蔭山誠一

銅剣形磨製石剣との出会い

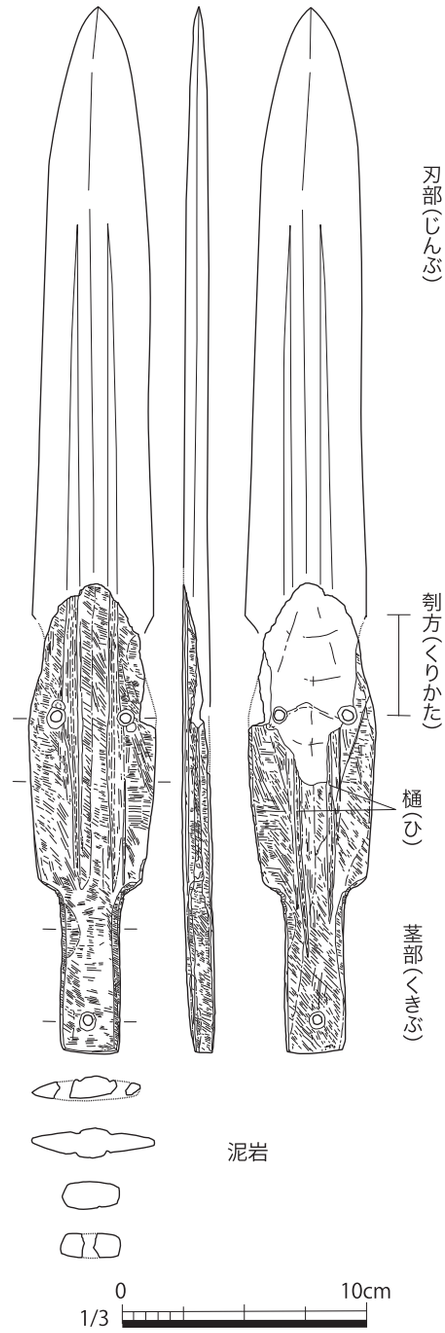
町屋遺跡は、一宮市千秋町町屋に所在する弥生時代の遺跡です。昭和の初期から多くの弥生土器や石器が発見・調査され、一宮の弥生文化を語る上で草分け的遺跡であります。平成一九年に現在の名神高速道路と県道名古屋江南線が交差する辺りを県道に沿って発掘調査が実施され、その調査の折に、私は長谷川昭三氏が所蔵する銅剣形磨製石剣を知りました。この銅剣形磨製石剣は発掘調査地点の西北西約一五〇ｍ付近の畑地で採集されたものであり、町屋遺跡を考える上で、重要な資料であることから、ここに調査を行った成果を報告します。尚、現在この磨製石剣は一宮市博物館に寄贈され大切に保管されています。

町屋遺跡の銅剣形磨製石剣

この磨製石剣は泥岩を用いて作られたもので、全体の色は緑黒色を帯び、表面全体が研磨されており、少し光沢が残る部分があります。全体の形は、弥生時代の青銅器である中細銅剣を石で模倣したもので、身の茎部に柄を留めたと思われる目釘孔が一ヶ所空いていることから、柄と組み合わせて用いた石剣であることが推定されます。銅剣を写した痕跡として、身の下側に刳方とよんでいる両側が弧状にくびれる部分がある点や断面菱形の身中央の鎬を挟んで、両側に樋とよんでいる溝を研ぎだしている点、身の刃部下側に石剣を垂れ下げたとも考えられる二つの並ぶ孔がある点があげられます。石剣の大きさは、身の刃部先端側を欠損していますが、現存している長さは全体で一九・二ｃｍ、刃部の幅五・二ｃｍ、刃部の厚み一・二ｃｍ、茎部の長さ六・九ｃｍ、茎部の幅二・四ｃｍ、茎部の厚み一・一ｃｍを計ります。同じ形で全形がわかる兵庫県七日市遺跡の銅剣形磨製石剣を参考に本来の大きさを復元すると、町屋遺跡のものは、全体の長さが四二・五ｃｍ程の大型の磨製石剣であったことが推定できます。

弥生時代の銅剣形磨製石剣

今回報告するの銅剣形磨製石剣については種定淳介氏により詳細に研究されており、銅剣形磨製石剣の製作は弥生時代前期末から中期初頭に始まるようであります。町屋遺跡の銅剣形磨製石剣は弥生時代中期後半に近畿地方を中心に分布する中細銅剣を模倣したと考えられている一群と考えられ、この一群の古いタイプは大阪湾沿岸から淀川沿いに分布しており、町屋遺跡の磨製石剣のように樋がある新しいタイプのものは、その後周辺の地域に広がっていったものです。そして弥生時代後期には消滅することが明らかにされています。石材は近畿北辺の丹波高地産出の粘板岩系統の石材（泥岩に分類できるものが多い）が



銅剣形磨製石剣実測図（1:3）

銅剣形磨製石剣

発掘調査が行われた町屋遺跡（07Cc区・07Id区、南より）

町屋遺跡の全体像

多く、町屋遺跡の磨製石剣と同じであります。また、種定氏が指摘した模倣した祖形となる中細銅剣の分布とも重なります（愛知県では名古屋市守山区上志段味において中細銅剣の出土が知られています）。

これらの特徴から町屋遺跡の銅剣形磨製石剣は、近畿地方を中心とする中細銅剣をよく知る文化の流れの中にあり、石材の種類から滋賀県の北西部付近から搬入された可能性が高い石器であります。愛知県では他にあま市阿弥陀寺遺跡や名古屋市貝塚山遺跡から銅剣形の可能性のある磨製石剣が知られていて、愛知県の尾張地域では中細銅剣を用いた文化とともに使われたものと考えられます。

まとめ

先に述べたように長谷川昭三氏により所蔵されていた銅剣形磨製石剣が採集された地点では、古くから梶田不二男氏をはじめとする町屋地区の方々により多数の弥生土器と石器が採集されてきました。平成一九年の発掘調査成果からは、町屋遺跡が南北約三七〇m、東西約二〇〇mに広がる遺跡であることが明らかになり、弥生時代中期後半には名神高速道路の北側に居住域の中心があり、その北側に方形周溝墓からなる墓域が広がっていたことが明らかになってきました。この発掘調査においても比較的大型の竪穴建物跡がある地点において同様な形の銅剣形磨製石剣の破片が出土し、付近では管玉や鳥形土器といった祭祀と関連するような特別な遺物が出土しました。これらのことから町屋遺跡においては、銅剣形磨製石剣が当時の祭祀を執り行なった集落の文化的主導者と関係する遺物である可能性が高いものと考えられます。

いずれにしても、今回調査をさせて頂いた銅剣形磨製石剣は町屋遺跡を代表する遺物であり、一宮の弥生文化を考える上で貴重な資料になるものと思われます。今後の調査・研究に活かされることを期待しています。

尚、この度の資料調査にあたり、長谷川昭三氏をはじめ、安藤春雄氏、長谷川稔氏にはご理解とご協力を頂き、誠にありがとうございました。一宮市博物館における資料調査の際には、土本典生氏・松本彩氏に大変お世話になりました。記して感謝の意とします。

〈引用・参考文献〉

梶田不二男 一九四一「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『尾張の遺跡と遺物』第二九号（復刻版中巻に所収）
坂重吉 一九四一「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」『尾張の遺跡と遺物』第二九号（復刻版中巻に所収）
千秋村史編纂委員会編・発行 一九五六「町屋遺跡」『千秋村史』
紅村弘 一九六三『東海の先史遺跡』総括編 名古屋鉄道株式会社
大参義一・岩野見司 一九六七「花ノ木遺跡」『新編一宮市史 資料編二 弥生時代』一宮市
梶山勝 一九八六「名古屋市守山区上志段味出土の銅剣について」『名古屋市博物館研究紀要』第九巻 名古屋市博物館
種定淳介 一九九〇「銅剣形石剣試論（上・下）」『考古学研究』第三六巻第四号・第三七巻第一号、考古学研究会
蔭山誠一編 二〇一三『町屋遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書」第一七九集（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

特別展
一宮の歴史と文化～江戸時代の暮らしと文化～
▼10月13日～11月18日

江戸時代の一宮市域は、美濃路・岐阜街道など街道が発展し、一宮村の三八市や苅安賀村・起村の市などが繁盛することにより、様々な物的交流とともに人的交流が生まれてきました。

そこで本展覧会では、人々がどのような暮らしをし、文化を育んできたかを、歴史資料を中心に紹介しました。会期中には、一宮市文化財保護審議会委員小川一朗氏を講師に「地域名望家の記録にみる近世後期の村と百姓」と題し、講演会を開催しました。

展示室

講演会

尾張平野を語る17
一宮の歴史と文化～一宮を語る
▼11月10日・11日

これまで、本講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など様々な分野から講師を招いて講演会を開催し、尾張平野について考えてきました。

十七回目となる今回は、『新編一宮市史』が編さんされ一宮市博物館が開館して二十五周年を迎える節目の年であることから、当地方の歴史研究の軌跡を多くの研究者とともに振り返り、歴史を次世代へつないでいく意義を考えました。

○内容

11／10(土)
「一宮を語る～最新の研究成果から～」

11／11(日)
「歴史を次世代へつなぐ～一宮市史から博物館へ」

11月11日　シンポジウムの様子

11月10日講演　石黒立人氏

企画展
2012 一宮市現代作家美術秀選展
▼12月1日～12月16日

今回が十二回目となるこの展覧会は、第七十回一宮市美術展の成果等をうけて、一宮市美術展依頼出品者・市長賞受賞者、一宮美術作家協会・一宮書道協会・一宮写真協会推薦者の作品を展示しました。

来館された方々には、展示された多くの作品と共に、出品者たちの一年の成果を楽しんでいただきました。

平成24年度の展示から

企画展
暮らしの中の民具～いちのみやの民俗
▼1月5日～2月24日

平成三年度より始まった、歴史を学び始める子どもたちのための「くらしの道具～今と昔～」。昨年度から「くらしの道具」全般を展示するとともに、「暮らしの中の民具」と題し、一つのテーマを選び、紹介しています。今年度のテーマは「いちのみやの民俗」。木曽川が形成した沖積平野という自然環境の中で育まれた暮らしや祭り・祈りを紹介しました。

○会期中の催し

1／6(日)平野の道具を使ってみよう!～食の道具編～
1／13(日)博物館でフィールドワーク～聞く・調べる・まとめる～
1／20(日)平野の道具を使ってみよう!～農具・織物の道具編～
1／27(日)いちのみやの民俗芸能～見る・聞く・学ぶ～
・午前の部…宮後住吉踊
・午後の部…石刀祭からくり人形・山之小路車
2／3(日)いちのみやの職人の技～見る・聞く・学ぶ～
・竹細工／桶
2／10(日)わたしたちの村の祭り～発表会～
・午前の部…臼台祭
・午後の部…ばしょう踊
2／17(日)いちのみやの伝統文化を学ぼう～子ども茶会～

平野の道具を使ってみよう!～食の道具編～

わたしたちの村の祭り(臼台祭)

博物館収蔵品展 風景と装飾～玉堂と琳派の近代

▼10月20日～11月15日

玉堂記念木曽川図書館にて、川合玉堂作品を中心とした一宮市博物館の収蔵品を紹介する展覧会を開催しました。今年度寄託された玉堂作品をはじめ、近代の絵画や工芸など十二点を展示しました。

また、学芸員による展示解説を七回行い、のべ四十五名の参加がありました。

博物館収蔵品展展示風景

公演 民俗芸能公演

▼2月24日

一宮市域には、江戸時代より続く伝統芸能や祭りが伝承されています。博物館では、民俗芸能の普及のため、毎年公演をおこなっています。今回は、市指定無形文化財「島文楽」を紹介しました。

市指定無形文化財「島文楽」

通年講座 古文書講座

▼5月～2月

五月から新しく十二名の方を迎え三十三名でスタートした講座も、平成二十五年二月九日、全十回の講座を終了しました。本年度は、宮地花池村木村家文書をテキストとして使用しました。講座では、人別帳、盗難届などをとおして、古文書の解読と江戸時代の人々の暮らしや生活文化について学びながら進めました。一回生の方は、初めて見るくずし字に悪戦苦闘しながらも、二・三回生の方とともに、和気あいあいとした雰囲気の中で楽しく学んでいました。

平成24年度の古文書講座より

通年講座 IMKC ミュージアムキッズクラブ

▼4月～3月

ミュージアムキッズクラブは、市内の小学校四～六年生を主な対象として、歴史・民俗・考古・自然・美術などの多彩な分野を総合的に学ぶ講座です。平成十八年度から開始し、現在小学生十七人、中学生・高校生二十人が参加しています。今年度は、「織物の歴史を学ぼう!～弥生時代の布を織る～」・ミュージアムキッズクラブ公開講座「落語で歴史を学ぶ～おもしろ歴史教室～」・「大野極楽寺公園の自然観察会」「ここがすてき!博物館」の四講座を実施しました。

公開講座「落語で歴史を学ぶ～おもしろ歴史教室～」

織物の歴史を学ぼう!～弥生時代の布を織る～

文化財めぐり

▼11月4日

市民の皆さんに、郷土の貴重な財産である文化財を紹介して、先人を偲び、文化財愛護の精神を高めていただくために、昭和四十二年以来毎年「市民文化財めぐり」を開催してきました。

今回は、運善寺～島文楽～小塞神社～長誓寺～博物館というコースを巡り、有形の指定文化財のみならず、市指定無形文化財である「島文楽」を実際に鑑賞しました。

小塞神社古墳での解説の様子

文化財保護週間 文化財防火パトロール 文化財防火訓練

▼1月17日 ▼1月24日

昭和二十四年一月二十六日に奈良・法隆寺の金堂壁画が焼失しました。以来、この日を「文化財防火デー」と定め、防災意識の高揚のため各種行事を開催しています。

市教育委員会は消防本部とともに一月十七日に文化財管理者宅での防火、消防設備点検をする文化財防火パトロール、同二十四日には防火訓練・文化財管理者研修を実施しました。

文化財防火訓練（石刀神社）

平成25年度催し物のご案内

※詳細は市広報・ホームページ、または博物館までお問い合わせ下さい。　※常設展示リニューアルのため、平成26年3月11日～9月末まで臨時休館いたします。

展覧会

- 企画展　近代の洋装と毛織物～文明開化のコスチューム　▼4月27日(土)～6月2日(日)
- 企画展　阿弥陀信仰と木曽川流域　▼6月15日(土)～7月28日(日)
- 夏休み子ども展示　みんなで調査！わたしたちのまち一宮～自然編～　▼8月3日(土)～8月25日(日)
- 2013　一宮美術作家協会展　▼8月31日(土)～9月16日(月祝)
- 一宮写真協会展　▼9月19日(木)～9月29日(日)
- 特別展　縄文から弥生へ～馬見塚遺跡の時代　▼10月12日(土)～11月17日(日)
- 企画展　2013一宮市現代作家美術秀選展　▼11月30日(土)～12月15日(日)
- 企画展　暮らしの中の民具　▼1月11日(土)～3月9日(日)

講座・公演

- 市民文化財めぐり　▼11月初旬予定
- 講座　尾張平野を語る18～仁王胴具足の謎に迫る　▼2月2・9・16・23、3月2日
- 公演　民俗芸能公演　▼3月9日(日)

通年講座のご案内

Museum Kids Club～ミュージアムキッズクラブ

▶平成25年4月～平成26年3月

歴史学や民俗学、考古学、自然、美術などに興味のある小学校4年生～6年生を主な対象に、総合的に学ぶことを目的とした活動をおこなっています。見学会・体験学習などさまざまな活動を盛り込み、考え方を育てます。
※詳細は、来年度の博物館HP、または学校向け情報誌「こみみ通信」をご覧ください。

古文書講座～古文書にしたしむ～

▶平成25年5月～平成26年2月（原則第2土曜日）

一宮市博物館では、市内在住・在勤の16歳以上の方を対象に、古文書講座を開講します。博物館で保管している江戸時代の地方文書を中心とした解読、およびその歴史的背景について学びます。昔の人々が書いた古文書を読んで、その時代の息吹を感じてみませんか。
※詳細は、市広報4月号をご覧ください。

＜新収蔵資料紹介＞豊田昌夫氏寄贈書簡類

この書簡類は、豊田氏が長年に渡り蒐集してきた、コレクションの一部です。今年度、当館にそのコレクションの一部として草稿・掛軸を含む230点余が寄贈されました。

このうち書簡は、190点余で、洋画家三岸節子、詩人佐藤一英、日本画家川合玉堂など郷土を代表する文化人の書簡や、日本画家の橋本関雪や堂本印象、歌人で精神科医の斎藤茂吉、乃木希典、吉田茂、青木周蔵など著名な人々の書簡があります。平成25年3月5日～3月20日まで、一宮市立中央図書館で展示しました。（表紙写真）

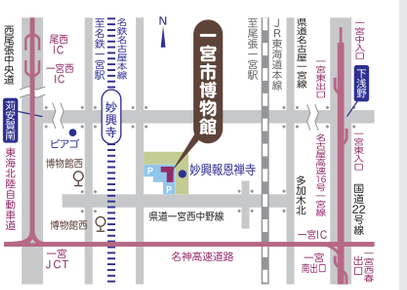
一宮市博物館だより
第51号

発行日／平成25年3月31日
編集・発行／一宮市博物館
印刷／三井堂株式会社

利用案内

[休館日]毎週月曜日、休日の翌日
[開館時間]午前9時30分～午後5時（入館は4時30分まで）
[観覧料]（常設展・聴講料含む）一般200円（160円）、高校・大学生100円（80円）、小・中学生50円（40円）
※（ ）内は20人以上の団体料金
※一宮市内小・中学生は無料
※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料
※身体障害者等の手帳を持参の方（付添人1人を含む）は無料

〒491-0922　愛知県一宮市大和町妙興寺2390
TEL0586-46-3215　FAX0586-46-3216
URL http://www.icm-jp.com/



[交通]名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口より徒歩7分
ニコニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分